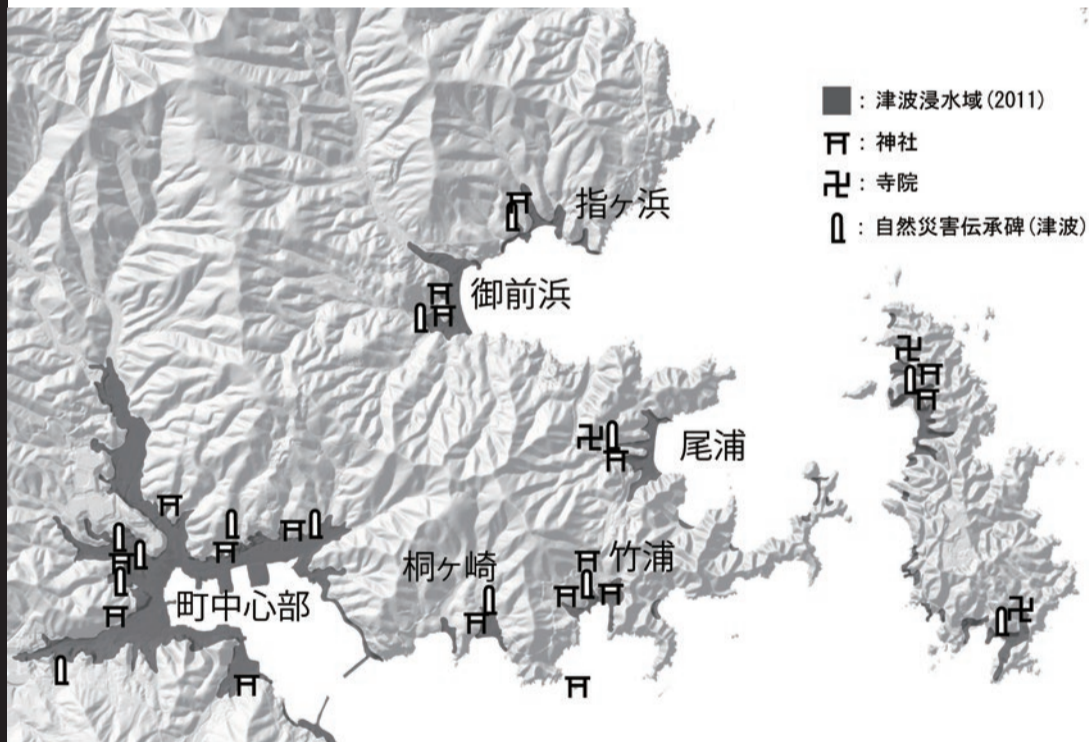


作品名	海と生きる決断	作品番号	1/5
校名	宮城大学		
氏名	鈴木大斗		

01 研究背景と目的

女川町北浦の5つの漁村集落は、それぞれの環境特性・産業特性を持っており、過去の幾度の災害にあっても復旧を繰り返し、漁村としての生活を維持してきた。しかし、東日本大震災による防災集団高台移転や人口流出で、職住分離や高齢化が進み、漁村集落としての機能を失いつつある。日本の集落の住宅は、その土地の環境特性や産業特性に合う空間構成をしており、まとまりのある集落が形成されていた。本研究では、女川町北浦地区に存在する5つの漁村を事例として、震災以前の今は無き空間特性や生活像を読み解き、加えて漁村には無い現代的価値観を取り入れることで、漁村において、それまで見られなかった形態の持続可能な集落建築の構築を目的とする。



海と生きる決断

パターン・ランゲージを用いた持続可能な漁村集落の構築

—女川町北浦地区を対象として—

宮城大学 事業構想学群価値創造デザイン学類 鈴木大斗

命や財産、時間、思い出を奪っていった津波、海。

その哀しみや辛さは決して癒えることはない。

幾度の困難を乗り越え、生まれ変わる郷土の姿。

その姿は、海と生きる集落。

海を拒まずに、海の側で暮らす。

震災後12年を迎えるいま、海の側に住み、生きることを問う。

02 女川町北浦の調査・分析

概要：女川町には北部の北浦地区に5つ、中心地区に2つ、南部の五部浦地区に7つ、離島部に3つの全17集落があり、牡鹿半島の複雑で急峻な地形に囲まれた限られた平地で生活を行ってきた。各集落が環境特性を把握した上で養殖漁業を行い、町中心部での水産加工業とのネットワークで結びつくことで、地域社会、経済構造を成している。

津波被害と信仰：女川町誌には、約1000年間での22回の地震・津波被害が記録されている。災害の度に、記録や伝承碑によって住民は防災意識を高めてきた。津波の浸水高20mを超えるような集落もあった中、町内の神社や寺院は全て流失を免れた。神輿や獅子を納めている神社もあり、過去の災害を経て信仰空間の位置が決められていることが推測できる。

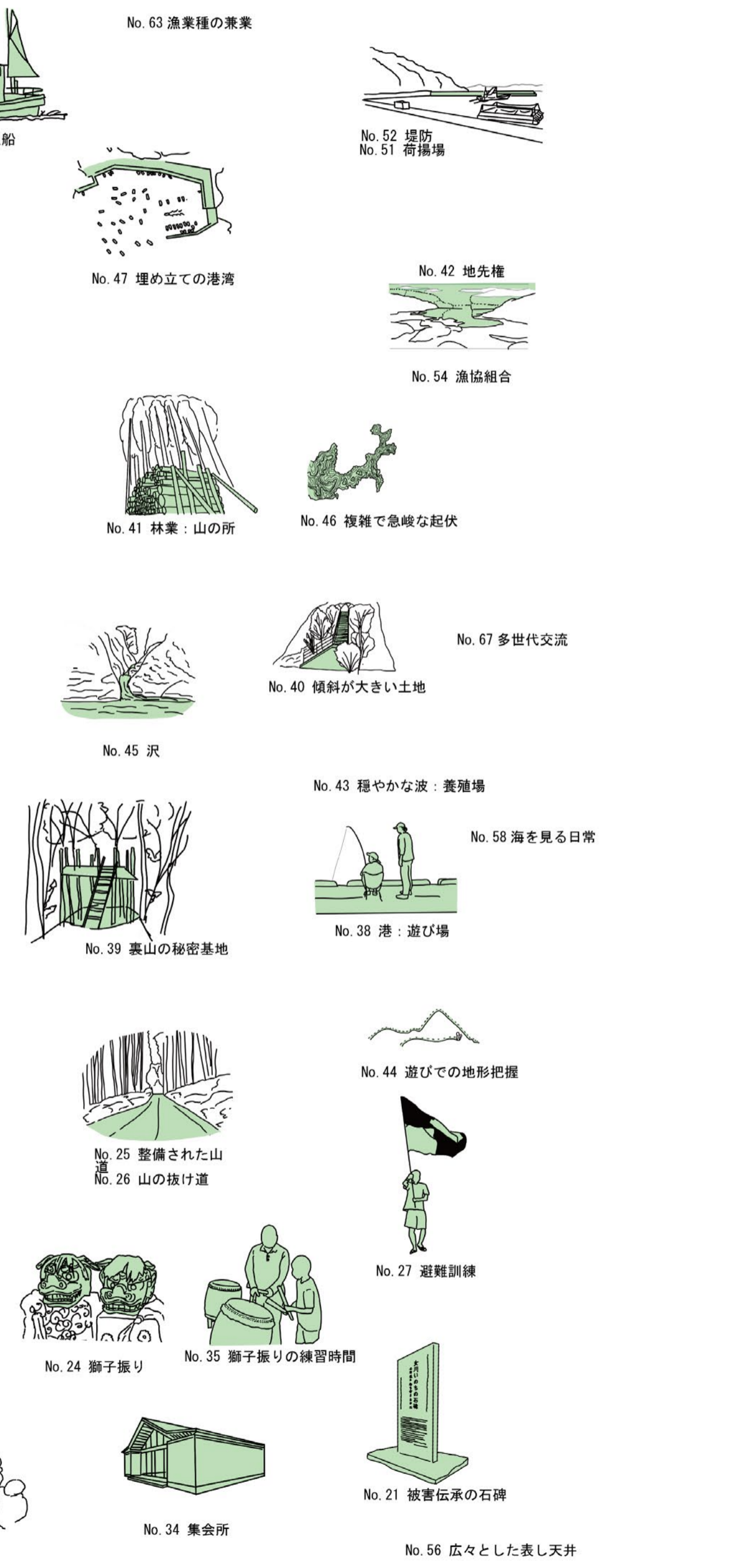
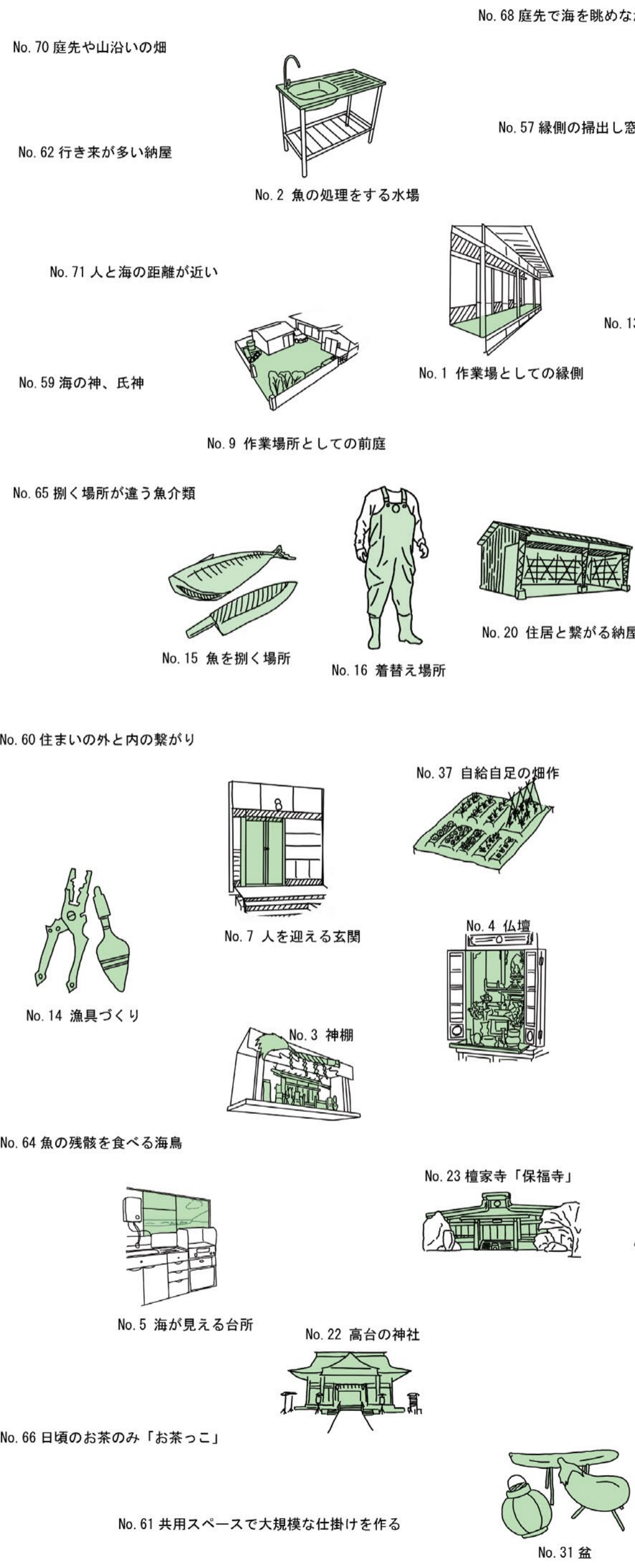
集落行事：女川町では正月になると獅子が集落内の家をまわり、無病息災や家内安全、大漁祈願を願う春祈祷が行われている。獅子振りには集落住民が老若男女問わず参加し、集落のコミュニティ形成そのものといえるものであった。

各集落の地形特性：5集落を立地と漁港の型で分類分けしている。谷戸立地は、急峻な尾根上の地形や岬の合間に住居域が位置し、ハマ立地は比較的平坦な土地が海際に面して広がっている立地をいう。漁港連続型は住居域の延長に漁港があるもの、漁港ズレ型は、住居域と漁港がずれて配置されているものをいう。

03 パタン・ランゲージの構築

作品名	海と生きる決断	作品番号	2/5
校名	宮城大学		
氏名	鈴木大斗		

女川町北浦の空間特性や日常生活をパタン化する。また、漁村になかった現代的価値観として、共有の割合を増やし小さな経済圏を形成する「地域社会圏主義」を取り入れる。地域社会圏主義は、文献から地域社会圏の構築に欠かせない要素をパタン化する。構築したパタン・ランゲージは設計の際に、全体の設計から、細部の設計まで利用する。



04 北浦共通の基本設計・ケーススタディ「桐ヶ崎」

I 敷地概要

人口：震災以前は74人28世帯（北浦での最小規模）
2018年には37人15世帯まで減少

地形：谷戸立地・漁港連続型
南の海岸以外山に囲まれた地形で
東の斜面が比較的傾斜は緩め

信仰：五十鈴神社（南西の斜面）
保福寺（集落から3.5kmに位置）

集落規模・産業形態は、震災前に立ち返り設計

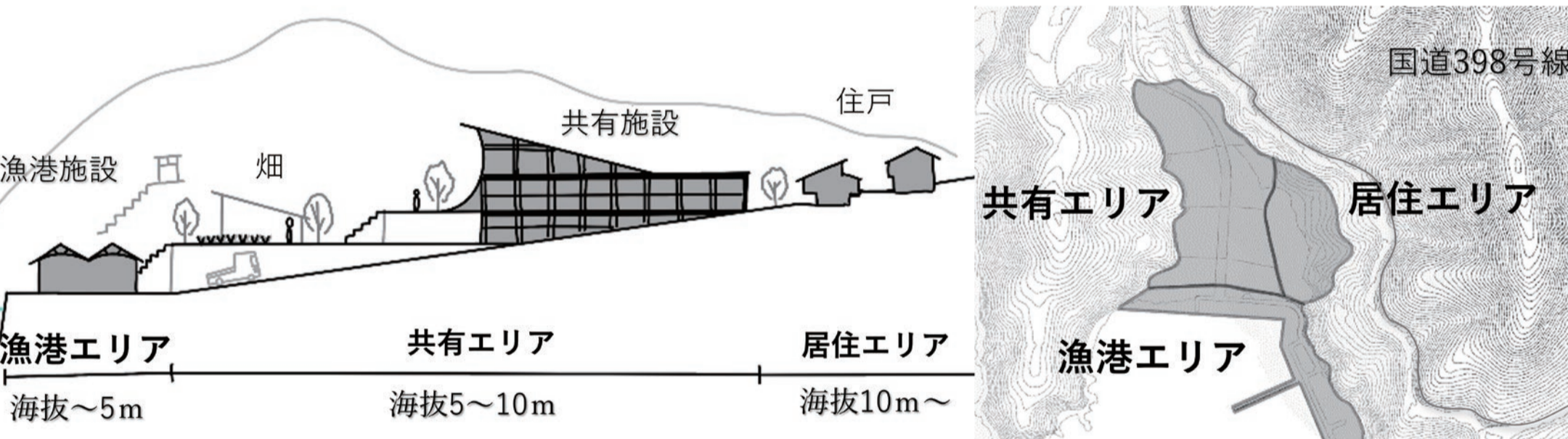


2008

2018

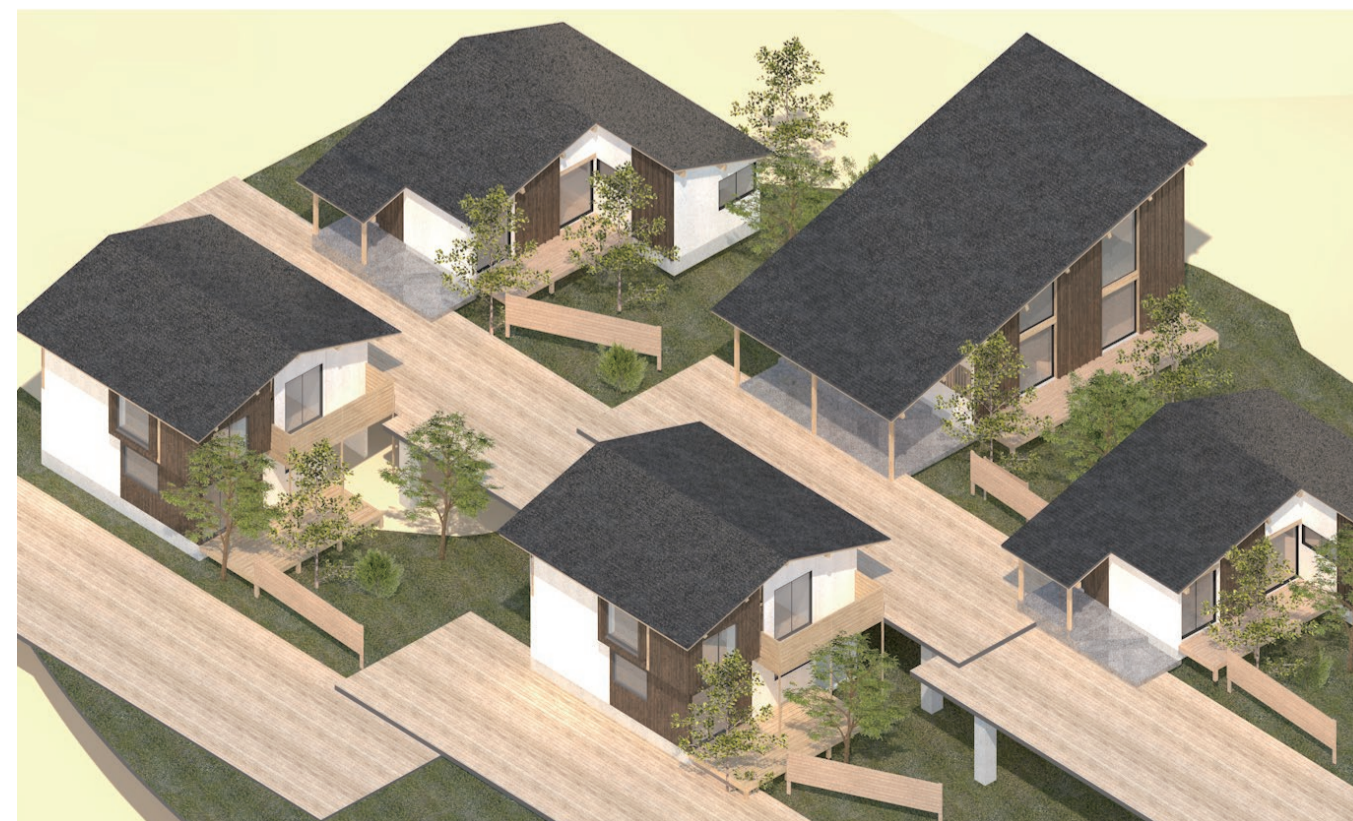
III ゾーン計画

集落内は、漁港エリア・共有エリア・住居エリアを高度を分けておく。共有エリアには集落の共有機能を持たせた施設を置き、畑など、パターンから従来の集落で点在していたものを置く。居住エリアは主に集落内の山間部斜面に置く。居住エリアは集落によって分割して整備し、エリアは防災面を考慮し、L2津波相当の海拔10m以上とする。桐ヶ崎のゾーン分けは以下の通りとした。



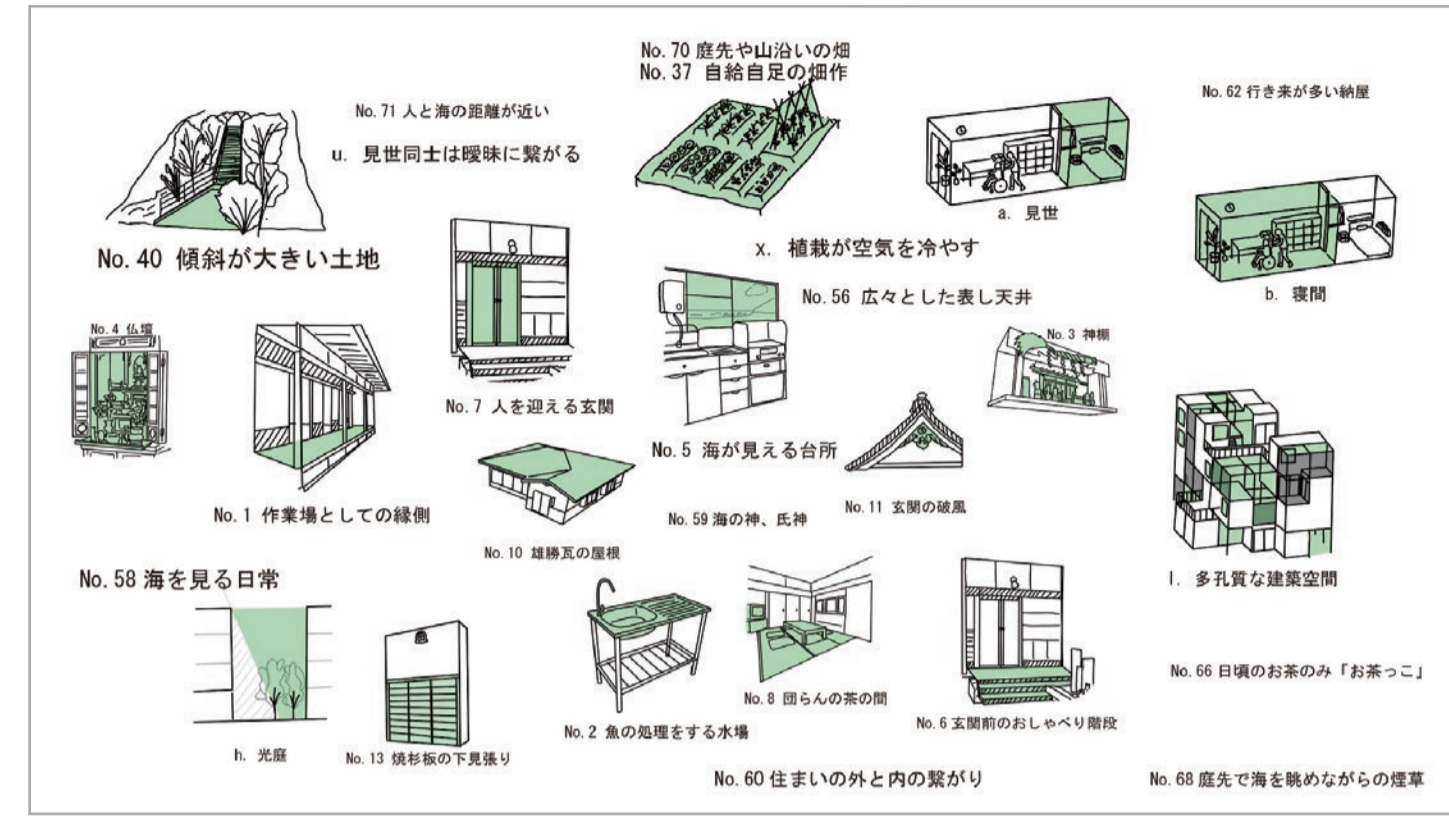
V 集落内の住まい

集落内の住まいは、地域社会圏主義の「見世」の考え方を活用したコミュニティ形成を図り、住まいは居住エリアと共有エリアの2つに設定します。共有エリアの住まいは部屋貸しを行い、集落外部からの居住者の仮住まいや集落住民の住まいとして柔軟に対応できるようにします。居住エリア内の住戸は世帯人数や機能の違いに対応して、あらかじめ複数の型を用意します。設計の条件は、斜面に建つ住戸であり、外部に開かれた「見世」を持つことです。複数の型を一度に設計することで、集落としての一体感を出し、設計の負担を減らします。



II エリアごとのパターン抽出

パターン・ランゲージを分解し、エリアごとに再構成を行う。以下は居住エリアでのパターンを抽出した例である。エリアを構築する上で必要になるパターンを漁村パターンと地域社会圏パターンからそれぞれ選択した。住居パターンは集落によって、漁港が東向き・南向き等僅かな違いが生じるため、集落ごとでの検討が必要になる。

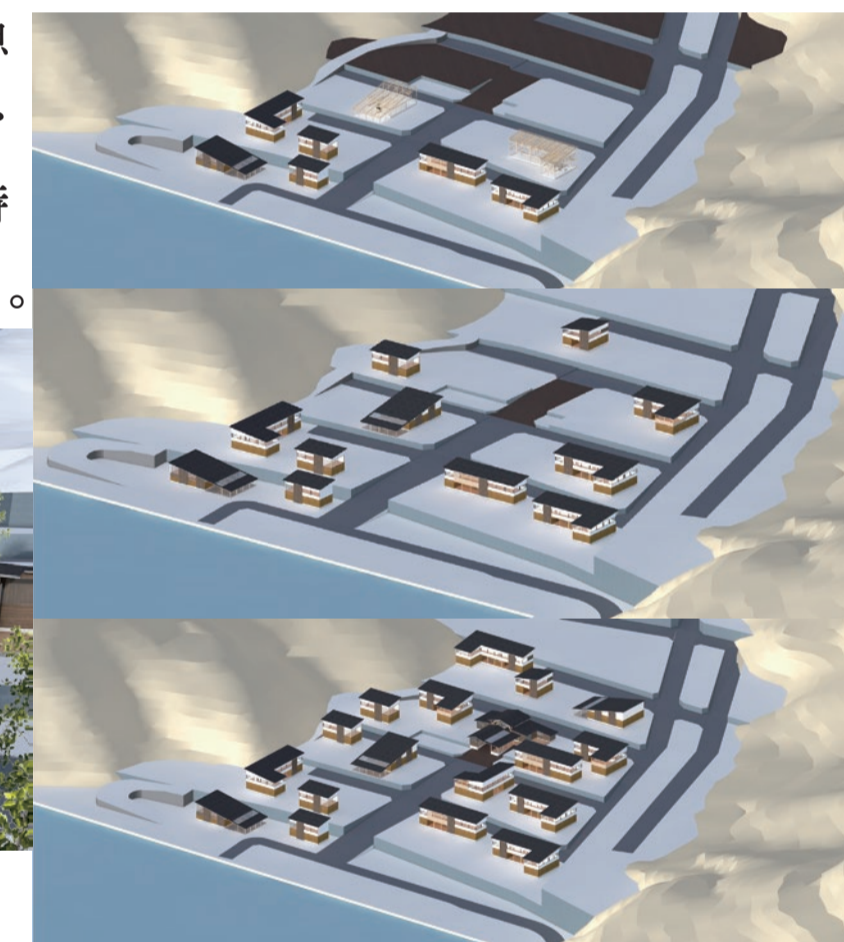


IV 計画順序

集落内の計画は段階を踏んで設定する。始めに生活に必要な漁港施設と住戸を置き、年数が進むにつれて少しずつ共有施設を増やす。最終的に共有の中心となる施設を置き、漁村集落の持続を支える。右図は共有エリアの計画順序を表したものである。



個共有エリアの様子。6つの共有施設の方を混合して建てる。



◁ 住居エリアの住戸に住む
▷ 共有エリアの二階に住む



05 居住エリアモデル

居住エリアの住戸は世帯人数や機能の違いに対応して、あらかじめ型を用意する。今回の設計では4つの住戸モデルを設定し、斜面に居住エリアを造るため、2階玄関の住戸と1階玄関の住戸を提示した。中央部分にアプローチを通し、地域社会圏の住まいの特徴である「見世」をアプローチに面した設計を行った。

06 災害に対する考え方

北浦をはじめ女川町の集落は、定期的な避難訓練を行い、災害に対する意識を高めてきた。東日本大震災の津波の際は、桐ヶ崎地区は低地に住みながら、震災時には津波による死亡者は出なかった。それは数十年に一度来る津波に対して危機意識・防災意識を絶やさなかったためである。高台を切り崩し海の見えない場所に移住し、海と住居を行き来する決断も解の1つだ。しかし、今までの集落は、海と共に生き、コミュニティ・生活の中心に海と漁業があり、漁業だけの海ではなかった。いまいちど、海と暮らすことについて考える必要があると思う。重要なことは、持続可能な集落のカタチを形成することだ。住居を並べるのではなく、コミュニティを持続・加速させるカタチづくりが必要だ。

住宅型は複数用意し、1階玄関案・2階玄関案・平屋案など、世帯人数・機能で分ける。

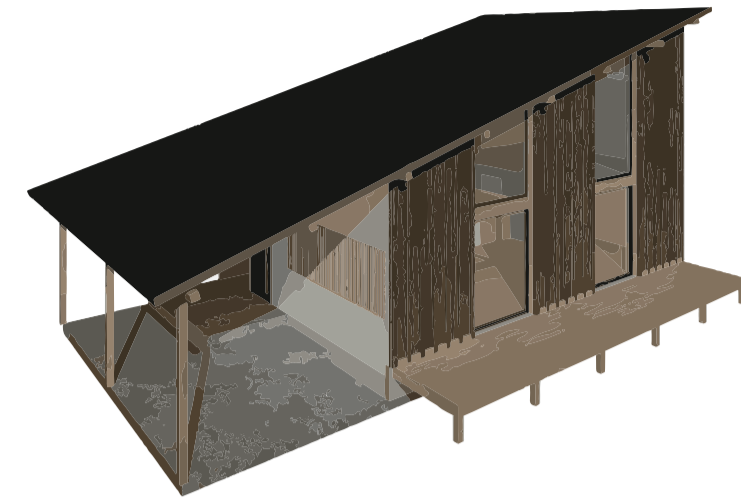
板塀や植栽を用いて、プライバシーを守る。適切な外構設計は豊かな生活につながる。共用空間を多くもつ集落にとって重要なことである。

2階玄関の住戸。アプローチに面する位置に「見世」を持つ。世帯ごとの敷地を持たずに、住戸は集落の持ち物としている。

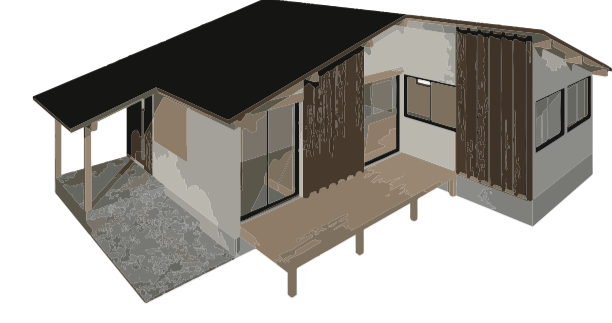
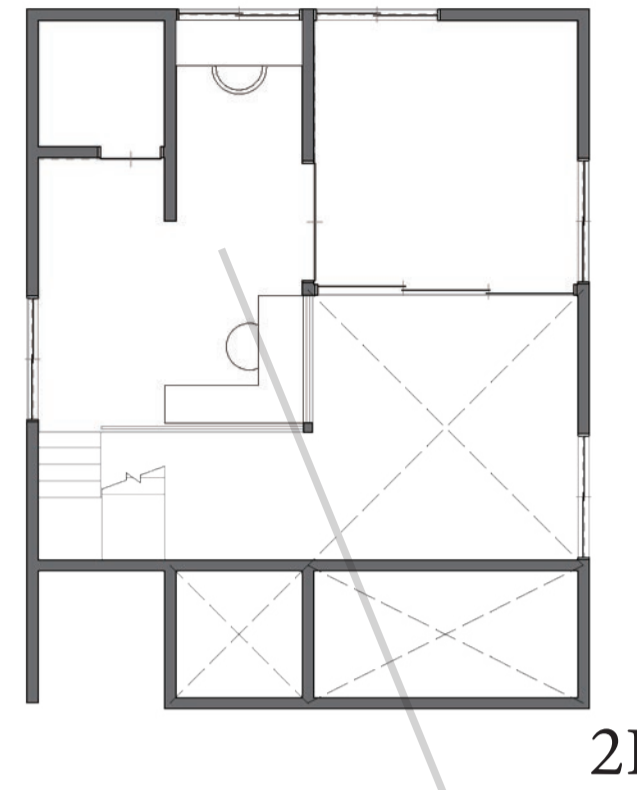
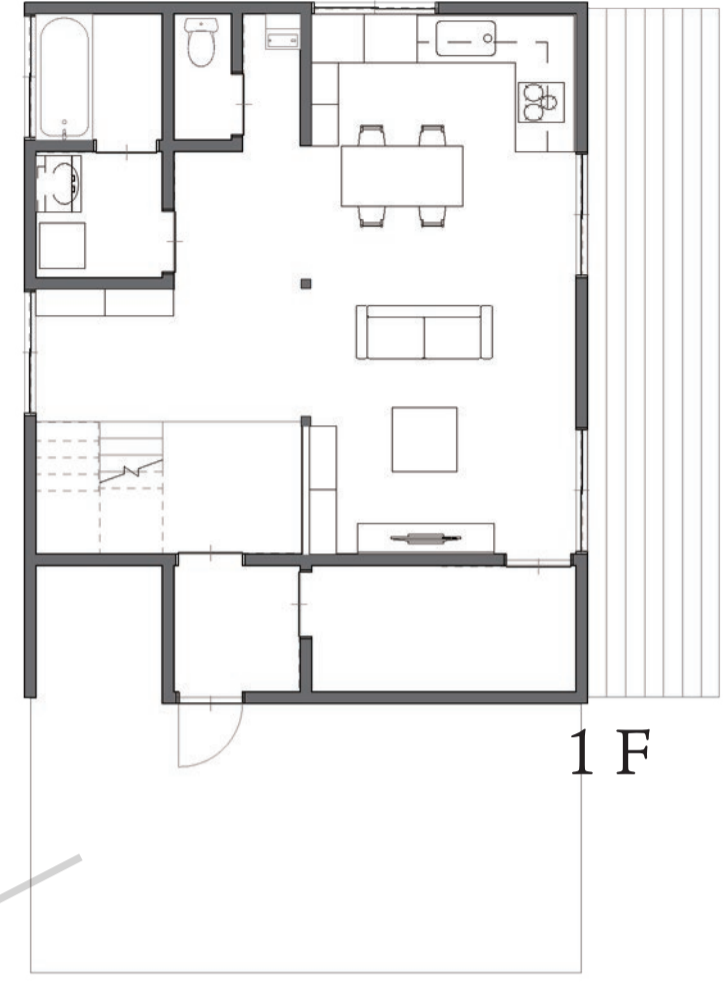


07 住居型 (一例)

作品名	海と生きる決断	作品番号	5/5
校名	宮城大学		
氏名	鈴木大斗		



キーワード：
大屋根、大窓、二階建て、吹き抜け
土間収納、作業スペース、デッキ、
寝間、土間スペース



キーワード：
平屋、L字、デッキ、高齢者向け、
作業スペース、土間スペース



集落内の住戸は、一定のデザイン
ルールを設ける。同一の塗り
壁、板張り、ウッドデッキを設
定することで、集落としての一
体感を持たせた。複数の住戸を
一度に設計することで、豊かな
まちづくりが出来る。

複数の作業空間を持つ。沿岸での釣り道具や、小
さな養殖道具の手入れを行うことが出来る。

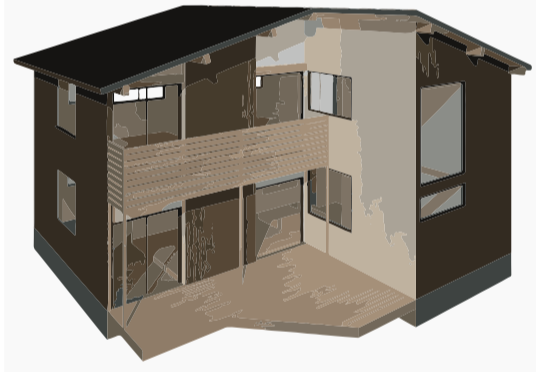
コンパクトなL字型の平屋。土間から収納・デッキ・
リビングと繋がる動線は生活を豊かにする。

2間×4間の広い軒下空間は見世として開いたり、
作業空間として利用でき、アプローチと繋がる。

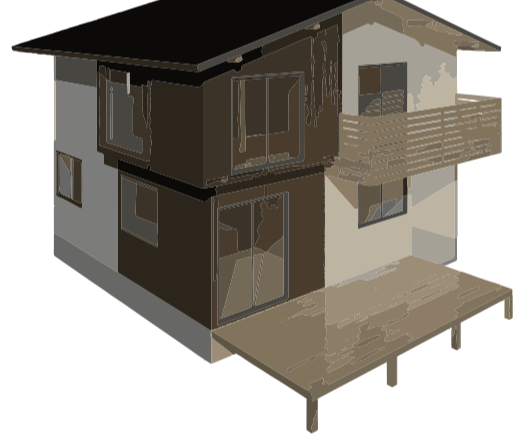
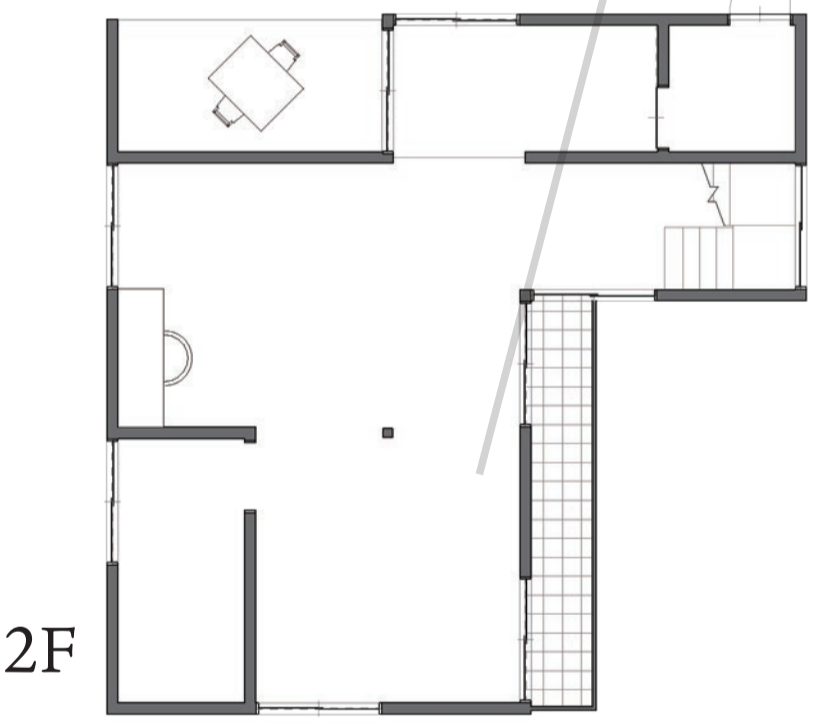
寝間は緩やかに繋がり、世帯内の人数変化に対応
出来る。バルコニーは庇代わりになる。

土間収納。外部の物置と繋がり、従来の納屋代わ
りになる。共用エリアの共用倉庫と合わせて使う。

二階の窓から海が見える。寝間と
同時に落ち着いた空間になる。



キーワード：
二階建て、二階玄関、
広い土間、作業スペー
ス、寝間、収納



キーワード：
二階建て、二階玄関、
作業スペース、寝間、
土間収納、出窓

